神を求めている人間　と　人間を求めている神

問 題 提 起

なぜ、あらゆる文化においても、あらゆる時代にも、
宗教が必ず存在しているのでしょうか。

Ａ．　人生の意義と神の現存の必要性

1.　人間の原動力　（どうして人間は、何もしないよりも、何かやりたいの？）

◆　要求、望み、欲望　（良いとして、必要として判断したものを追求する。）

◆　恐れ　（危険として判断されたものを攻撃する、それとも、これらから逃げる。）

２．意義を必要とする人間の行動

◆　目的　－　要求、欲望や恐れが起こす行動の結果

◆　希望　－　目指す目標に達することは可能であると信じること

◆　**目的と希望によって人間の行動が意義のあるものになる。**

３．人間の自由の限界

◆　物理的な限界

◆　無意識の要求と恐れ　（意識している要求や恐れを拒むことが出来ますが、意識していない要求や恐れに忠実に従い、その奴隷になっています。）

◆　真理　（動けること（自由意志）が出来ても、目指している目標に達するために（自由）、この目標に導く道（真理）を知る必要があります。そのために、限られた知識は、私たちの自由を制限しています。）

４．要求の限界

◆　自分の要求を知らない人や、知っていてもそれが正しいものであると自信をもっていない人、つまりはっきりした選択基準をもっていない人は、他人にいろいろな要求を押し付けられやすい、支配されやすい人です。私を利用しようとする（私の善ではなく、自分の善を求めている）他人に押し付けられた要求に基づく行動は、意味のある行動とは言えません。

◆　自分の要求をはっきりと意識しても、要求の対象は、善であり、必要なものであるという判断が間違っている場合は、この行動の結果は、求めている善ではなく、求めていない

悪であることがあります。自分の行動が本当に意味のあるものになるために、正しい判断（正しい知識をもつこと、真理を知ること）が必要です。

◆　要求の対象は、正しいものであっても、その実現が難しくて、それをあきらめることや、変えること（要求を小さくする、目的を変える、変わりの必要性を作り上げること）があります。本当の必要性を表す要求を満たさなければ、人生の目的に達することが出来ません。従って、この人生が意味のあるものであると言えないでしょう。

◆　人間の要求は、無限に大きくなるものですので、それを有限なものによって完全に満たすことができません。従って、人間の要求が示している目的に達することがありません。

５．人間の恐れと希望の限界

◆ 偽りの恐れと安心感（何が危険であるか、または、何が安全であるかという判断が正しくなければ、恐れによって起こしている行動の目標は、求めている善になりません。）

◆ 根拠のない希望（もっている希望は、本当の可能性ではなく、ただの自分の要求を表す期待や想像であるならば、自分の行動は、最初から、意味のないものなのです。）

◆ 偶然の出来事（病気、事故、災害などの予想のできないものによって、意義のある行動は無駄（無意味）にされることがあります。以外で、望ましくない体験の意義を探したり、またはそれに意味を付けたりしますが、出来ないこともあります。）

◆ 避けられない死　（死によって、人間は、もっている全てのものを失い、全ての努力が無駄になります。死は、すべての希望を奪い取ります。死で終わる人生に意味があるでしょうか。）

６．三つの可能な態度

◆ 問題を無視する（人生全体の意味や目的ではなく、身近な目標を考える。目標のない、つまり意味のない人生に見えるが、実は、自分が目指している目的を意識していないだけ。精神的に、楽かもしれないが、人間らしくない生活。自分で創った幻想の中に生きる。現実から離れているので、現実の幸福を味わうことが出来ない。いつまで可能？）

◆ 人生には、意味がないという決断（実存主義。意味のある宇宙の中で、人間だけ無意味な存在？何らかの希望がなければ、人間は生きられるのだろうか？）

◆ 人生の正しい目標（真理）を教えて、その目標に導いてくれる存在、つまり、人間の本当の必要性を表すすべての要求を満たし、永遠の命を与えることによって人生の意味を保護してくれる存在（神）を認める（多くの宗教が存在している重要な理由）

B．啓示に基づくキリスト教の答え

1．神の望みと人間の創造

「神は、無限に完全、他によることのない至福そのものであって、ただいつくしみによる計画から、ご自分の至福ないのちにあずからせる人間を自由に創造されました。したがって、いつ、どこでも、人間に親身に心を配り、呼びかけ、人間が全力を尽くしてご自分を求め、知り、愛することができるよう助けておられます。」（CCE1）

📖 「わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。」１コリ 8:6

📖 「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」ヨハ 17:3

📖 「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。」１テモ 2:4

📖 「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。」ヨハ 6:44

📖 「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」ヨハ 12:32

2．人間の望みと神へのあこがれ

「神へのあこがれは人間の心に刻まれています。人間は神によって、神に向けて造られているからです。神はたえず人間をご自分に引き寄せておられます。人間はただ神のうちにだけ、求めてやまない真理と幸福を見いだします。」（CCE27）

📖 「神よ、あなたはわたしの神。わたしはあなたを捜し求め／わたしの魂はあなたを渇き求めます。あなたを待って、わたしのからだは／乾ききった大地のように衰え／水のない地のように渇き果てています。」詩 63:2

「主よ、あなたはわたしたちを、ご自分に向けてお造りになりました。
ですから、わたしたちの心は、あなたのうちに憩うまで、
安らぎを得ることができないのです。」　聖アウグスチヌス

３．神を信じる

信仰とは、
ご自分を啓示し、ご自分との関わりへ招いてくださる神への
人間の応答なのです。

４．　多くの人は神に向かって生きていない原因

📖 「まことに、イスラエルの聖なる方／わが主なる神は、こう言われた。「お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」と。しかし、お前たちはそれを望まなかった。」イザ 30:15

- ◆ 自分を知らない（自分の本当の望み（必要性）ではなく、偽りの望み（必要性）に動かされている、自分の本当の必要性とただの欲望の区別がつかない）
- ◆ 神を知らない（無関心であるか、神を怖がっている）
- ◆ 今の生き方への執着（自分や神を知らずに、作り上げた幻想に生きる）
- ◆ 生き方の変化（回心、メタノイア）に伴う苦しみ
- ◆ 自由や自立を失う恐れ（自分の望みと神の望みが違う場合の苦しみ）
- ◆ 自分の力や能力への疑い（イエスに忠実に従う力があるのか）
  - ◆ 信者（宗教者）の悪い模範
  - ◆ 反宗教的風潮
  - ◆ 世の思い煩いや富の誘惑
  - ◆ 世の不正と悪に対する反抗
  - ◆ 恐れのために神から隠れ、神から逃げようとする罪びととしての人間の姿勢

１１．以上の妨げを乗り越えるためのキリスト教の霊性（道）

第１　原理と基礎

- ◆　自分の人生の中で神の働きと現存のしるしを見出す
- ◆　今までの自分の人生において神の愛と完全な交わりへの招きを見出す
- ◆　自分の本当の望みを認識する

第２　罪

- ◆ 自分の現実（自分の人生の方向）をありのままに認める（認識する）
- ◆ 神との関係を深めることが出来ない理由などを認識する（７参照）
- ◆ 神の無条件の愛を知る

第３　イエス・キリスト

- ◆ キリストを内面的に知る（キリストへの愛を深める）
- ◆ 個人的な召命（自分に対する創造主である神の望み、自分の本質、人生の意義と目標）を知る

第４　イエスの受難

- ◆　キリストの受難にあずかることによって、キリストとの関係を一層深める
- ◆　神の愛の偉大さを知る

第５　イエスの復活

- ◆　キリストの栄光（勝利）に預かることによって、キリストとの関係を一層深める
- ◆　神は力強くて、誠実な方であることを実感する

愛に達するための祈り

- ◆　自分の心は、神に対する一層大きな愛で燃えるように、神を体験する
- ◆　全てのものにおいて神を見、神において全てのものを見る